

〈論 文〉

英語の基本構文と対応する
日本語表現についての覚え書き
—「分析性」と「体験性」の観点から—

Notes on Basic English
Sentences and the Corresponding
Japanese Sentences

— through an analytical sense
and an experiential sense —

尾 野 治 彦

Haruhiko ONO

はじめに

日本語の「体験性」、英語の「分析性」は、これまで一連の尾野の論文で扱ってきたテーマである¹⁾。本稿のねらいは、英語の基本構文とも言える、強調構文、so~that 構文、too~to 構文、enough~to 構文、比較構文を、対応する日本語原文もしくは日本語訳と対比し考察することにある。

英語原文でのこれらの基本構文は、「~したのは…だ」「とって~なので…だ」「~するには…すぎる」「~するのに十分な」「より~」と直

訳される。しかし、絵本や小説の翻訳においては、このような直訳で訳出されている場合もあるにはあるが、英語原文でのこれらの構文が意識されないほどの自然な日本語に訳出されている場合のほうがはるかに多い。また、逆に、感覚体験的な日本語原文が分析的な英語の基本構文を用いて訳出される場合も多くある。いずれの場合にせよ、もし、翻訳において、英語原文の基本構文が直訳的な日本語に訳出されないとすれば、それは、日本語の「体験性」にはなじまないためであり、逆に、体験的な日本語原文がそのまま英語に直訳されないとすれば、それは英語の「分析性」にはなじまないためということになる²⁾。

なお、本稿は、これらの構文をめぐっての日英語比較を、言わば、覚え書きとして記したものであって、もとより、本格的な論考をめざしたものではないことをお断りしておきたい。また、否定文そのものは構文とは言えないが、英語の否定文とその日本語対応表現には、「分析性」と「体験性」の対比がはっきり表れている例が多く、本稿で取り上げることにする。

最後に、言語表現の「体験性」・「分析性」と文化との関連性についてもふれてみたい。

1. 強調構文³⁾と対応する日本語表現

強調構文の英語に対しては、辞書などでは、(1a) に対し (1b) のような日本語が与えられるのが一般的である。

- (1) a. It is Ally who Billy phoned last night.
b. ビリーが昨夜電話をかけたのはアリーだった。

(『ウィズダム英和辞典 第3版』2013: 2159)

しかし、英語を直訳したこのような日本語は、英語の「分析思考」がその

まま表わされたものであって、日本語本来の〈見え〉を「知覚体験」するままだに述べた表現ではない⁴⁾。

以下の例を見てみよう。

(2) ぐりと ぐらは、ドアを あけました。

すると、おおきな ながぐつが あります。

(『ぐりとぐらのおきゃくさま』：10)

Guri and Gura carefully open the front door and walk into their house. The first thing they see is a very large pair of boots.

(*Guri and Gura's Surprise Visitor* : 12)

(3) かなえは、げんかんの ドアを あけました。にわの むこうは、しらない とおりで、しらない ひとが あるいているだけでした。

(『とんことり』：8)

Maya opened the front door. Beyond their front yard, all she could see was an unfamiliar road and strangers walking by.

(*Gifts from a Mailbox* : 8)

これらの日本語原文では、主人公が現場での認識の原点となり、そこからの「視覚体験」が述べられているのであるが、主語が明示された(2)の“The first thing they see”や(3)の“all she could see”では、主人公が「場面の外」から客観的に描かれており、日本語の「場面内視点」と英語の「場面外視点」の違いがはっきり表われている。これらの英語表現での強調は、「場面外視点」からの分析によるものである。

また、英語の強調構文では、「時」が強調されている例がよく見受けられるが、その場合、辞書においては、(4a)の英語に対し、(4b)のような直訳した日本語訳が与えられるのが一般的である。

(4) a. It was late at night when we reached our destination.

b. 私たちが目的地に着いた時には夜も更けていた。

(『ジーニアス英和辞典 第5版』2014 : 2378)

しかし、「時」の表現が現れる実際の日本語原文の用例においては、次の(5)のように、「時」は現場で進行する事象の「場」として設定される場合が多く、また、これに対応する英語訳としては、(4a)のように、事象の分析結果として、「時」が強調されて訳出される場合が多いと言える。

(5) そういう時、彼女の顔のなかにともし火がともったのだった。

(『雪国』 : 11)

It was then that a light shone in the face. (Snow Country : 10)

また、「時の推移」が関わる表現では、英訳では日本語原文での「時の推移」が無視され、(5)の英訳のように、特定の時が強調されて訳出される場合が多い。

いくつか、実例を見てみよう。

(6) その店から外へ出ると、すっかり夜になっていた。(『点と線』 : 68)

It was already dark when they left the coffee shop.

(Points and Lines : 45)

(7) 滝沢たちは、ようやく昼過ぎに署に戻った。

(『凍える牙』 : 46)

It was not until early afternoon that they got back to the station.

(The Hunter : 27)

今度は、逆のパターンとして、英語原文での強調構文が、どのような日本語に訳出されているのか見てみよう。先の(1)の日本語訳は、原文の英語が強調構文であることがわかる直訳であったが、体験的な日本語訳では、英語原文での「強調」が訳出されていない事例のほうが多い。

次の例を見てみよう。

- (8) Again, it was Daniel who explained that they had experienced their first frost, ... (The Fall of Freddie the Leaf : 11)

「霜がきたのだ。」とダニエルが言いました。

(『葉っぱのフレディ』: 11)

この日本語訳では、ダニエルが強調されておらず、自然な日本語となっている。

次の例はどうだろうか。

- (9) "I ought to be mourning her but all I can feel is this terrible anger."
(Devices and Desires : 441)

「彼女の死を悼むべきだとは思っても、ただひたすら腹が立つばかりなんです」
(『策謀と欲望(下)』: 256)

先の(2)と(3)の英語訳と同じように、(9)では、主語による知覚が明示されている英語原文が、日本語訳では、知覚主体が認識の原点となっており、「感覚体験」が感じられる。

また、英語原文で「時」が強調される場合には、対応日本語訳においては、先の(5)の日本語原文におけるように、「時」は、現場の「場」として訳出される事例が多い。

- (10) It was then that she heard the creak of the stairs, and her father came in. (*Devices and Desires* : 219)

その時、階段のきしむ音がして、父が入ってきた。

(『策謀と欲望(上)』: 288)

また、英語原文での「時」の強調構文が、日本語訳では、(6)と(7)の日本語原文のように、現場での「時の推移」として訳出される場合も多い。

以下の訳文は、そのような例である。

- (11) It was late when he arrived home. (*Badger's Parting Gifts* : 4)

夜になって、アナグマは家に帰ってきました。

(『わすれられないおくりもの』: 4)

- (12) It was after midnight when he finally left.

(*Devices and Desires* : 78)

リカーズは真夜中を過ぎてようやく帰った。

(『策謀と欲望(上)』: 111)

少なくとも、以上の限られた例からではあるが、日本語においては、原文であれ、和訳であれ、「時」は、「場を設定する時」、あるいは、現場での「時の推移」を表す表現として、「感覚体験的」に捉えられる事例が多いとは言えそうである。

2. so~that

英語には、2つの事象を因果関係として関連づける so~that 構文がある。この構文の対応日本語表現としては、(13a)の英語に対し、(13b)のような和訳が与えられるのが一般的である。

(13) a. I was so tired (that) I couldn't keep my eyes open.

b. とても疲れていたの目を開けていられなかった。

(『オーレックス英和辞典』2008：1837)

しかし、“so A that B” に対しての「とても A なので B」との直訳は、事象の因果関係を明示的に分析したものであって、〈見え〉に対する、見たまま、感じたままをそのまま述べる本来の日本語ではない。

まずは、日本語原文において連続的に捉えられている事象が、so~that と分析的に英訳されている例を見てみよう。

(14) ……ちいさな こえしか できませんでした。だれもできません。

(『はじめてのおつかい』：14)

So quietly that the storekeeper must not have heard, for no one appeared.

(*Miki's First Errand*：14)

(15) 「わくわくしちゃって、なかなか ねむれないね」

(『やまのぼり』：28)

“I'm so excited that I can't go to sleep.”

(*Grandma Baba's Dream Mountain!*：28)

例えば、(14) の「ちいさなこえしかできません」と「だれもできません」の連続した事象が、英語版では、“no one appeared” なので、“the storekeeper must not have heard” であると、事象に対する分析的な推論として述べられている。(15) では、「わくわくして」と「ねむれない」の関係は因果関係とも言えるが、その関係は、分析の結果としてではなく、現場での連続的な、あるいは同時的な事象の直接的な繋がりとして捉えられている。また、「わくわくしちゃって」と“so excited” には、主人公の「現場の感覚」と「客体化された感覚」の違いが感じられる。

日本語原文に次のような「びっくりして」が用いられ、対応する英語表現が、so~that と英訳されている場合もよく見受けられる。

- (16) かなちゃんは びっくりして 「うわわわおーん！」と ないて しまいました。 (『ブルくんとかなちゃん』：5)

Katie was so surprised that she cried out loud, “Waaah..”

(*Katie and Boo* : 5)

- (17) りすさんの うちでは、びっくりして、みんな とびだしてきました。 (『ねずみのおいしゃさま』：24)

Mrs. Squirrel’s family was so surprised to see him that they all came out of the house. (*Dr. Mouse’s Mission* : 24)

(16) と (17) のどちらにおいても、日本語原文では、単に「びっくりして」であって、「とてもびっくりしたので」といった分析的な表現にはなっていないことに注目すべきである。また、「びっくりして」とそれに続く事象の間には、先の (14) と (15) の日本語原文のように、「連続性」と「同時性」が感じられる。一方、so~that の英語訳では、これらの一連の出来事は「見え」の対象としてではなく、事象と事象が「関係づけ」られ、「因果関係」として「分析的」に捉えられている。

次に、逆のパターンとして、so~that と分析されている英語原文が、どのような日本語に訳出されているのかを見てみよう。

まずは、次の例である。

- (18) “... But I’m so cold and tired I can go no further.”

(*The Robot and the Bluebird* : 10)

「……でも、さむくて つかれて、もう とべません」

(『ロボットとあおいことり』：10)

- (19) In the studio George was kept so busy all the time that he forgot to be curious. (Curios George Takes a Job : 42)

さつえいじよでは、いそがしくて、じょうじは、あちこち きよろきよろするひまも ありませんでした。(『ひとまねござる』: 42)

これらの英語原文では、例えば、(18) においては、“cold and tired” と “I can go no further” が因果関係として「関係づけ」られているが、日本語訳では、「とても」等の表現がなく、「さむくて、つかれて」と「とべない」の2つの事象が、現場の感覚とそれに続く事象として述べられており、分析行為は感じられない。

次は、日本語訳に、「うれしくて」「よろこんで」といった、「感情表現」が現れている場合である。

- (20) He was so happy that he did three somersaults on his bed ! (Olle's Ski Trip : 2)

うれしくてベッドの上で三どもでんぐり返しをしました。

(『ウツレと冬の森』: 2)

- (21) CHOO CHOO was so glad to be found that she blew one “Toot” with her whistle. (CHOO CHOO : 38)

ちゅうちゅうは、ジムたちが みつけにきてくれたので、とてもよろこんで、ちいさい こえで 「ふう！」と、きてきを ならしました。(『いたずら きかんしゃ ちゅう ちゅう』: 38)

(20) の日本語訳は、「うれしくて」とそれに続く事象が、「同時的」「連続的」に述べられ、(21) の日本語訳では、まず、「ジムたちがみつけにきてくれ」、その結果「よろこんで」という時の流れにそって出来事が述べられている。もっとも、「よろこんで」は、「とてもよろこんで」と「とて

も」があるので、一見、因果関係の分析のようにも思えるが、ここでは、「とてもよろこんだので」という「ので」のある表現にはなっていないことに注目すべきである。さらに言えば、「ジムたちが みつけにきてくれた」は、現場の状況を述べているとも考えられ、(21)の英語と日本語については、「因果律の英語」と「状況との関係の日本語」(安西 2000 : 104)の対比と捉えることも可能であろう。

次の例はどうだろうか。

(22) Alice sat so still that the long-fingered hands resting in her lap, the folds of her shift, might have been carved in stone.

(*Devices and Desires* : 474)

アリスはじっと座っていた。膝に置かれた指の長い手と上着のひだが、まるで彫刻のように見える。(『策謀と欲望(下)』: 298)

(22)の日本語訳は興味深い。“Alice sat so still that. . .”は、「アリスはとてもじっと座っていたので……」ではなく、「アリスはじっと座っていた」と現場の〈見え〉がそのまま述べられ、更に、最後で「見える」が用いられ、述べられた内容が「視覚体験」として捉えられたことが明示されている。

3. too~to、enough~to 構文と対応日本語表現

3.1. too~to 構文

次は、too~toの用例である。too~to構文には、次のような英文と訳語がのっているのが一般的である。

- (23) a. This is too serious a problem for us to ignore.
b. これは我々にとってあまりにも深刻な問題なので無視するわけにはいかない。 (『E ゲイト英和辞典』2003 : 1767)

しかし、先の「とっても～なので」と同様に、「～するには…すぎる」の訳は、あくまで因果関係として捉えた分析的なもので、知覚体験的な日本語にはなじみのないものである。

いくつか、日本語原文とその英語訳として too～to が現れている例を見てみよう。

- (24) とにかく、何とか記念日をやり過ごすことが出来た、それだけで、少しは気持ちが安定してくる。あとは事件のことだけを考えることにしよう。 (『凍える牙』 : 175)

And now, a year later, she had managed to get safely past that anniversary, with too much to do to feel any foolishness. She would focus on the case. (The Hunter : 94)

- (25) 客が立て込んでいたせい、折角の蕎麦が期待したほど旨くなく、竹村はがっかりした。 (『戸隠伝説殺人事件』 : 209)

The shop was too crowded for Takemura to enjoy the buckwheat noodles he had been so eager for, ...

(The Togakushi Legend Murders : 170)

(24) の「それだけで、少しは気持ちが安定してくる」と「あとは事件のことだけを考えることにしよう」は、主人公の内面の気持ちとして述べられている。「内面の気持ち」は、分析として捉えられる性質のものではないが、英訳では、too～to が用いられ、「気持ち」すらも分析的に捉えられているとも言える。(25) について言えば、日本語原文では、「客

が混んでいた」→「蕎麦がうまくなかった」→「がっかりした」と事象が「連続的に」捉えられているが、対応する英語表現では、そのような事象の「連続性」は感じられず、主語の「感情」を表す「がっかりした」の表現もない。ここでの英語表現に感じられるのは、「混んでいる」と「蕎麦がうまくなかった」との二つの出来事が「因果関係」として「関係づけ」られた分析である。

次に、英語原文での *too*~*to* 構文がどのような日本語に訳出されているのかを見てみよう。

- (26) Pig dried herself on a bundle of straw, her legs too tired to dance anymore. She needed a rest, a rest in the hay. (*Barn Dance!* : 24)
ふたは ひとりで からだを ふきました。ああ、くたびれた。
わたしもそろそろ、やすみましょう。(『まんげつダンス!』: 24)

英語原文では、*tired* と *dance* が因果関係として分析的に捉えられているが、日本語の「くたびれた」と「やすみましょう」には、主人公の声が、「直接話法」として述べられていて、そこに、因果関係の分析行為は感じられない。

次の例を見てみよう。

- (27) an eel whose tail was almost too far away to remember. . .
(*Swimmy* : 15)
うなぎ。かおを みる ころには、しっぽを わすれてるほど
ながい…… (『スイミー』: 15)

(27) の日本語訳は、英語原文にはない、移動による時の経過が感じられる。

次の例はどうだろうか。

(28) He was too intelligent not to know that she was reassuring him.

(*Devices and Desires* : 119)

頭のいいアレックスには、アリスが励ましてくれているのがよく
わかった。 (『策謀と欲望(上)』: 164)

(28) の日本語訳では、認知主体の認識内容が「主観的な印象」として述べられている感じがあるが、英語原文では、too～toではなく、分析性の度合いがさらに強まった too～not to となっており、これをそのまま直訳した「～しないには…しすぎる」は、自然な日本語としての体をほとんど成していないと言えよう。

3.2. enough～to

enough～to 構文でも、辞書では、次の日本語訳のように因果関係がわかる直訳が一般的であるが、特に、「～だけ」や「～ほど」という日本語が特徴的である。

(29) There was enough money for them to go on a holiday.

彼らが休暇に出かけられるだけの金があった。

(『オーレックス英和辞典』2008 : 596)

まず、日本語原文が、enough～to と英語に訳出されている例を見てみよう。

(30) 格子の前に立っていた私の耳にそのいさかいの調子だけはほほわ
かった。 (『こころ』: 27)

I could hear well enough to know that it was a quarrel, . . .

(*Kokoro* : 18)

(31) 足踏みをしたくなるような寒さの中で、それでも貴子は動かなかった。
た。 (『凍える牙』 : 481)

It was cold enough to need to stamp the ground to stay warm, and yet she did not move. (*The Hunter* : 251)

(30) では「おもう」があることから、「みみもつぶれる」は認知主体の「思考体験」として捉えられている。(31)の「足踏みをしたくなるような」には、「感覚体験」が感じられる。それに対し、日本語表現においては「思考体験」や「感覚体験」として捉えられた出来事の中に複数の事象を見出し、それらの間に「関連性」を見つけて分析的に表現するのが英語的な表現ということになるだろうか。

次に、英語原文の例を見てみよう。

(32) She snatched at the receiver, hoping that she had been quick enough to stop it waking her father. (*Devices and Desires* : 218)

父が目を覚ましてはいけないと思い、テリーザはあわてて受話器を取った。 (『策謀と欲望(上)』 : 286)

ここにおいても、日本語訳においては、分析的な意味あいは感じられず、また、「思い」があることから、英語原文では enough~to として捉えられた事象が、「思考体験」として捉えられていることがわかる。「思考体験」には、先の(24)の「内面の気持ち」の場合と同様、事象と事象の分析行為は存在しない。

次の例の日本語訳の「暖かさに誘われて」には、認知主体の「感覚体

験」が感じられ、また、時空間のある現場の「場面の移動」が感じられる。

(33) It was just warm enough to keep the window down as we drove to
Choctaw, ... (Breakheart Hill : 211)

暖かさに誘われて、チョクトーまでの道すがら、車の窓を開けたま
まにしておいた。 (『夏草の記憶』 : 311)

4. 比較構文

これまで見てきた、so~tha 構文、too~to 構文、enough~to 構文は、
二つの出来事を「関係づけ」、因果関係として分析するというものであ
ったが、比較についても、2つの事象を「関係づけ」て分析するという点に
おいては共通したものがあると言える。一方、現場の知覚体験を表す日
本語においては、「関係づけ」という分析行為が関わる比較表現はあま
り用いられないのではないかと予想される。

まず、日本語原文に対し、英訳として比較級が用いられている例を見
てみよう。

(34) 外の雨の音が俄に激しくなった。 (『雪国』 : 33)

The sound of the rain outside was suddenly louder.

(Snow Country : 34)

(35) 雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈
んでいるようだった。 (『雪国』 : 13)

The white of the snow made the deep eaves look deeper still, as if
everything had sunk quietly into the earth. (Snow Country : 12)

(34) と (35) のどちらの日本語原文にも、「比較」という分析行為は全く
感じられない。さらに、(35) は、「見せて」が用いられた「視覚的」な文

であるが、英語では、make の「使役」構文として分析的に捉えられている。

また、次の英語訳で否定語と共に用いられる比較級の表現は、分析的な言語であればこそとも言え、体験的な日本語では、その直訳はあり得ない表現である。

- (36) 貴子は、予想していたことではありながら、半ば落胆して、その様子を眺めていた。 (『凍える牙』：236)
Takako had expected no less, yet she felt half-disappointed as she watched. (The Hunter : 125)

次の例では、日本語原文の「ますます」に対して、英語では比較級が対応しているが、「ますます」のほうが、より「感覚的」とは言えよう。

- (37) ますます頭がかつとなる。 (『凍える牙』：440)
Now she was even more excited. (The Hunter : 230)
- (38) 立花が冗談めかして言った言葉に、竹村警部はますます険しい顔を造った。 (『戸隠伝説殺人事件』：116)
Takemura's expression became even more grim. (The Togakushi Legend Murders : 97)

次に、英語原文が比較級の例を見てみよう。

- (39) ... and after that he felt much better. (The Very Hungry Caterpillar : 17)
おなかの ぐあいも すっかり よくなりました。

(『はらぺこあおむし』：17)

- (40) The forest had never looked more beautiful,
and without thinking⁵⁾ I went a little further than usual.

(*The Lying Carpet* : 34)

あの日、森は、かつてないほど美しく、

つい、遠出をしてしまったのだ。(『ほらふきじゅうたん』：34)

(39) の日本語訳の「すっかり よくなりました」に、英語原文の比較級のニュアンスは感じられない。また、(40) では、“went a little further than usual” が「遠出」と訳され、ここでも、比較級のニュアンスは全くない。

また、次の日本語訳のように、英語原文が、「だんだん」「どんどん」のようなオノマトペで訳出される場合も多いが、これは、英語における比較という分析行為が、日本語では、オノマトペとして感覚的に捉えられているということを意味しよう。

- (41) Toad was getting colder and colder.

(*Frog and Toad Are Friends* : 49)

がまくんは だんだん ひえて きました。

(『ふたりはともだち』：49)

- (42) More and more of the ice cream was melting.

(*Frog and Toad All Year* : 34)

アイスクリームは どんどん とけていきました。

(『ふたりはいつも』：34)

5. 肯定文・否定文

最後に、肯定文と否定文の対比の例であるが、次のように、日本語と

英語の否定が対応する場合がある場合があることは言うまでもない。

(43) 人の姿は見えなかった。 (「踊る手」『夜消える』：120)

There was not a soul about.

(“Dancing Hands” *The Bamboo Sword* : 252)

その一方で、「日本語には否定的・消極的表現が多い」(小島 1988:207)ということがよく言われる。ちなみに、小島(1988)で取り上げられている日本語の否定表現は次の2つである。

(44) 「星は夜しか見えない」⁶⁾

Stars can be seen only at night.

(45) 「こんな長い橋は見たことはありません」

This is the longest bridge I ever saw. (小島 1988 : 207)

しかし、日本語の「体験性」、英語の「分析性」の観点からすれば、「〈見え〉の知覚対象」となるものは現場に存在するものであるので、よって、事象をありのまま肯定的に捉える日本語は、英語よりは否定表現が少なくと予想されることになるのではないだろうか。

このことを考慮に入れて、以下の実例を見てみよう。まずは、肯定文の日本語原文が、否定表現として英訳されている場合である。

(46) 外には、まだ朝の気配さえ漂っていないように見えた。

(『凍える牙』：320)

There was still no sign of morning.

(*The Hunter* : 169)

- (47) ゆうだちのように、おゆがふってきた。みると、くじらだ。かばのからだについていたあわが、どんどんきえて ながれていく。

(『おふろだいすき』：26)

When we turned around, there was a whale! Thanks to his shower all the bubbles on the hippopotamus' body and mine were gone in no time.
(*I Love to Take a Bath* : 26)

- (46) と (47) には、「見る」という語が用いられ、現場の事象が「視覚体験」として捉えられていることが示されているのに対し、否定語句が現れた英語表現に「現場性」は感じられない。

次の例はどうだろうか。

- (48) 捜査はすっかり暗礁に乗り上げている。 (『凍える牙』：174)

The investigation was going nowhere. (*The Hunter* : 94)

- (49) すかさず、音道がボードを差し出した。 (『凍える牙』：402)

Without a moment's delay, Otomichi offered him the board.

(*The Hunter* : 212)

- これらの日英語対比においては、「暗礁に乗り上げている」「すかさず」の日本語表現のほうが、not のある分析的な「そっけない客観的」な対応英語表現よりも、「味のある感覚的」な表現となっていると言えよう。

次はどうだろうか。

- (50) あっと いうまに、…… (『ぐりとぐらのかいすいよく』：14)

And in no time. . . (*Guri and Gura's Seaside Adventure* : 14)

(51) 「うわわ！おおきくて、まっしろい！」

きいろくんは、おもわず、……

クル、クル、クルッと がようしに ちょうを とばしてみました。

(『くれよんの くろくん』：5-7)

“Wow! How big and white!”

Without thinking,

Yellow. . . began to swirl and twirl, and

draw butterflies on the paper. (*Blackie, the Crayon* : 5-7)

ここでも、「あつという間に」や「おもわず」のほうが、否定のある対応英語表現よりも、「感覚・体験的な表現」であると言えよう。

次の例を見てみよう。

(52) 甚内は泣き上戸である。泣きながら、手はまめに動いて杯を一気にあけた。 (「一顆の瓜」『冤罪』：282)

Jinnai would often weep when he was in his cups, although this did not affect the pace of his drinking.

(“All for a Melon” *Bamboo Sword* : 63)

否定表現のない日本語原文のほうが、否定表現のある英語訳よりも、「現場で進行している事象」を表わすのにふさわしいことは言うまでもないことである。

次に、英語原文で否定表現が用いられているのに対し、日本語原文では、肯定表現が用いられている例を見てみよう。

まずは、日本語ではあり得ない表現として次のような否定主語構文があげられる。

- (53) ... no two leaves were alike, ... (*The Fall of Freddie the Leaf* : 5)
……ひとつとして 同じ葉っぱはない……
(『葉っぱのフレディ』 : 5)

現場での現象に存在する知覚体験を述べる日本語であれば、英語のような否定主語の構文は日本語ではありえないということになる。

次の (54) と (55) は、英語原文の否定表現が、日本語では、〈見え〉の視覚対象として捉えられ、肯定表現が用いられている例である。

- (54) They didn't go far before they saw the little engine.
(*CHOO CHOO* : 38)

まもなく、ちいさい きかんしゃが みえてきました。

(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』 : 38)

- (55) Not far ahead was a cluster of trees. (*Hotel* : 252)
すぐ前方にちいさな森があった。 (『ホテル (下)』 : 88)

次の (56) と (57) についても、〈見え〉の対象として捉えられた日本語訳では、現場の事象が知覚体験的に表現されているのに対し、対応する英語原文では、現場での体験性が感じられず、分析性が感じられる。

- (56) Now Harry was sure. He didn't wait another second.
(*Harry by the Sea* : 19)

こんどは たしかです。ハリーは、はしりだしました。

(『うみべのハリー』 : 19)

- (57) Faith hadn't heard a sound in the house all afternoon.
(*The Lying Carpet* : 28)

屋敷のなかは、あいかわらず、しずかです。

(『ほらふきじゅうたん』：28)

そもそも、否定という行為は、ある事象とその否定を「関係づけ」る「分析行為」と捉えることは可能であろう。そうであるとすれば、「分析的」な英語表現が、日本語よりも、否定表現が多いのは、きわめて自然であるということになる。

6. 「体験性」・「分析性」と文化との関連性

原口(1982:331-335)は、日本文化を規定する原理が「素材主義」であるのに対し、西洋文化を規定する原理が「修辞主義」であるとしているが、この見解は、そのまま、本稿での日英語表現での「体験性」と「分析性」に当てはまると考えられる。すなわち、「体験性」とは、対象を見たま、感じたままに表現する「素材主義」であり、「分析性」とは、知覚された素材に対し、分析や抽象的思考を加えた「修辞主義」であるとすることは十分可能である。またこのことから、言語表現に種々の技巧をこらす「修辞主義」とは異なり、「自分の真心をありのままに述べるのが最大の美しさであり、効果的表現である」(原口 1982:332)とする「素材主義」においては、修辞学が発達してこなかったのは当然ということになる。

原口は、「素材主義」と「修辞主義」の原理の文化の表れの例として、自然のままが美しいとされる「日本庭園」と人為的・幾何学構造の美しさからなる「西洋庭園」の違いや、食材のよさをそのまま活かし、「料理をしないことこそが、日本料理の理想」(石毛 1974)とする「素材主義」の日本料理観と、フランス料理のような「人手を加え技術をふるうことによって食えないものを食べるものに変える」という「修辞主義」の西洋料理観の違いをあげている。

もしそうであるとすれば、日英語表現における「体験性」と「分析性」は、日本語文化と英語文化を特徴づける「素材主義」と「修辭主義」という射程のより大きな原理と重なり合うことになり、言語を規定している原理と文化を規定している原理は重なり合うものであるということになる⁷⁾。

7. まとめ

本稿で扱った、英語の、強調構文、so~that 構文、too~to 構文、enough~to 構文、比較構文、否定構文は、事象を分析的に捉えるという点で、きわめて英語的な特徴が表われているということになる。一方、日本語は、知覚するまま、体験するままに捉える言語であるため、事象の分析をきらい、英語の分析構文を直訳した日本語は自然な日本語とは相容れないということになろう。

日本語の特徴としては、「場内視点」の言語であることからの必然的な帰結としての「体験性」が挙げられるが、この「体験性」をさらに具体的に言えば、本稿でふれた、「知覚体験性」、「現場性」、「時の推移」、「連続性・同時性」、「感情表現」、「主人公の気持ち」、「直接話法」、「主観的な印象」、「思考体験」、「味のある感覚的な表現」、「現場での進行している事象」といった特徴になると思われる。一方、英語の特徴としては、「場外視点」の言語から必然的に帰結する「分析性」が挙げられるが、さらにこの「分析性」を具体的に言えば、「因果関係」、「関係づけ」、「分析性」、「分析思考」「そっけない客観的な表現」ということになろう。

これらの「体験的」な諸特徴と「分析的」な諸特徴は相容れないものであり、これらの特徴はそのまま、「味のある感覚的」な日本語表現と「そっけない客観的」な英語表現につながるものである。また、これらの表現の特徴は、日本語文化と英語文化を規定する「素材主義」と「修辭主

義」に重なり合うものでもあることについてもふれた。

注

- 1) 本稿で示されている「体験性」「分析性」、「場面内視点」「場面外視点」等の概念については、尾野 (2015) を参照されたい。
- 2) 英語の「分析」的な表現、日本語の体験的な表現は、それぞれ、池上 (2006) の言う「事態把握」の違いによる「好まれる言い回し」とも言える。
- 3) 強調構文とは、“It is～that…”の分裂構文や、“What～is…”の疑似分裂構文をさすのが一般的であるが、本稿ではそれに加えて、“the first thing they see”や“all she could see”といった関係節を用いた強調の表現も含むものとする。
- 4) 辞書での和訳は直訳が多いが、これは、一つには、英語の構文の理解を助けるためであり、一つには、辞書の例文は、コンテキストがない、言わば、「場」のない表現であるためと考えられる。
- 5) “without thinking”に対する「つい」の訳語は、例文 (48) と (49) のような味のある和訳に付け加えてよいかもしれない。
- 6) (44) と (45) は、否定表現が用いられている日本語であるが、この2つの表現は、本稿で例文としてあげている、現場の事象に対しての「知覚体験」を述べた文ではない、(44) は知識として述べた文であり、(45) も過去をも含めた幅のある期間を対象としたものであるということは、指摘しておいてよいと思われる。また、(45) について言えば、日本語として、「これは、今まで見たうちの最も長い橋です」という表現も可能ではあるが、この肯定表現よりは、「こんな長い橋はみたことはありません」という否定表現のほうに、話者の感情がより現れていると言える。ということであれば、(65) は否定文ではあるが、日本語が本来的にもっている感覚体験を表しているとも言える。なお、この表現には、日本語の「こと」が表す意味内容も関わっているように思われる。「こと」については、尾野 (2004) を参照されたい。

- 7) 本稿での見解は廣瀬 (2016) の見解とも重なると思われる。廣瀬は、「主観性と言語使用の三層モデル」(2016: 336) において、「私的自己中心の日本語では、通常、状況把握が状況報告および対人関係から独立している。したがって、状況把握においては、話し手は自由に状況の中に身をおき、状況内から状況を捉えることができ」るのに対し、「公的自己中心の英語では、通常、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される。状況把握と状況報告が一体化するということは、状況を報告する状況外の視点が優先されることであり」としているが、「状況把握層」と「状況把握と状況報告が一体化した層」が、それぞれが、本稿での「体験性」と「分析性」に相当すると考えられる。というのも、「体験」において、話し手は「自由に状況の中に身をお」いているのであり、「分析」というメタ認知的な認識行為においては、「状況を報告する状況外の視点が優先されること」になるからである。

参考文献

- 安西徹雄. 2000. 『英語の発想』(ちくま学芸文庫), 筑摩書房.
- 池上嘉彦. 2006. 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』5月号, 20-27.
- 石井直道. 1974. 「食物と文化」『文化と人類』朝日新聞社.
- 尾野治彦. 2004. 「小説における補文標識「の」「こと」の使い分けについて—語り手の心的態度の観点から—」『日本語科学』(国立国語研究所編) 第15号, 45-68.
- 尾野治彦. 2015. 「日本語の「知覚体験表現」と英語の「分析表現」—日米の映画ポスターにみる「体験性」と「分析性」に関連して—」『函館英文学』54号, 1-31.
- 小島義郎. 1988. 『英語の意味・日本語の意味』南雲堂.
- 原口庄輔. 1982. 『ことばの文化』こびあん書房.
- 廣瀬幸生. 2016. 「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの(間)主観性とその展開』, 中村芳久・上原聡(編), 325-345, 開拓社.

用例出典

日本語原文のもの

内田康夫. 1985. 『戸隠伝説殺人事件』(角川文庫), 角川出版社.

The Togakushi Legend Murders. David J. Selis (tr.). 1994. Tuttle Publishing.

大塚勇三 (作)・丸木俊 (絵). 1964. 『うみのがくたい』福音館書店.

The Ocean-Going Orchestra. Sarah Ann Nishie (tr.). 2006. ラボ教育センター.

川端康成. 1947. 『雪国』(新潮文庫), 新潮社.

Snow Country. Edward G. Seidensticker (tr.). 1956. Vintage International.

さとうわきこ. 1991. 『やまのぼり』福音館書店.

Grandma Baba's Dream Mountain!. Richard Carpenter (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.

筒井頼子 (作)・林明子 (絵). 1986. 『とん ことり』福音館書店.

Gifts from a Mailbox. Jaylene Mory・Susan Howlett (tr.). 2004. アールアイシー出版.

筒井頼子 (作)・林明子 (絵). 1977. 『はじめてのおつかい』福音館書店.

Miki's First Errand. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2003. アールアイシー出版.

中川正文 (作)・山脇百合子 (絵). 1974. 『ねずみのおいしゃさま』福音館書店.

Dr. Mouse's Mission. Mia Lynn Perry (tr.). 2007. アールアイシー出版.

中川李枝子 (作)・大村百合子 (絵). 1976. 『ぐりとぐらのかいすいよく』福音館書店.

Guri and Gura's Seaside Adventure. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2004. チャールズ・イー・タトル出版.

中川李枝子 (作)・山脇百合子 (絵). 1966. 『ぐりとぐらのおきゃくさま』福音館書店.

Guri and Gura's Surprise Visitor. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.

- なかやみわ. 2001. 『くれよんのくろくん』 童心社.
Blackie, the Crayon. Mia Lynn Perry (tr.). 2005. アールアイシー出版.
- 夏目漱石. 1951. 『こころ』(角川文庫), 角川出版社.
Kokoro. Edwin McClellan (tr.). 1969. Tuttle Publishing.
- 乃南アサ. 1996. 『凍える牙』(新潮文庫), 新潮社.
The Hunter. Juliet Winters Carpenter (tr.). 2006. Kodansha International.
- 松岡享子(作)・林明子(絵). 1982. 『おふろだいすき』 福音館書店.
I Love to Take a Bath. Mia Lynn Perry (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 松本清張. 1971. 『点と線』(新潮文庫), 新潮社.
Points and Lines. Makiko Yamamoto and Paul C. Blum (tr.). 1970. Kodansha International.
- ふくざわゆみこ. 2003. 『ブルくんとかなちゃん』 福音館書店.
Katie and Boo. 2005. Mia Lynn Perry (tr.). アールアイシー出版.
- 藤沢周平. 1982. 「一顆の瓜」『冤罪』(新潮文庫), 新潮社.
“All for a Melon” *The Bamboo Sword*. Gavin Frew (tr.). 1981. Kodansha International.
- 藤沢周平. 1994. 「踊る手」『夜消える』(文春文庫), 文藝春秋.
“Dancing Hands” *The Bamboo Sword*. Gavin Frew (tr.). 1981. Kodansha International.

英語原文のもの

- Beskow, E. 1982. *Olle's Ski Trip* (English Translation by Forsell, K.) ラボ教育センター.
『ウツレと冬の森』おのでらゆりこ(訳). 1981. らくだ出版.
- Burton, V. L. 1999. *Choo Choo*. ラボ教育センター.
『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』むらおかはなこ(訳). 1961. 福音館書店.
- Buscaglia, L. 1982. *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.
『葉っぱのフレディ』みらいなな(訳). 1998. 童話屋.

- Carle, E. 2006. 『*The Very Hungry Caterpillar*/はらぺこあおむし』もりひさし (訳). 偕成社.
- Cook, T. H. 1995. *Breakheart Hill*. Quercus.
『夏草の記憶』芹沢恵 (訳). 1999. (文春文庫), 文藝春秋.
- Hailey, A. 1966. *Hotel*. Bantam Books.
『ホテル (下)』高橋豊 (訳). 1974. (新潮文庫), 新潮社.
- Hutchins, P. 2007. *Barn Dance!* Greenwillow Books.
『まんげつダンス!』なかがわちひろ (訳). 2008. 福音館書店.
- James, P. D. 1989. *Devices and Desires*, Faber and Faber.
『策謀と欲望 (上) (下)』青木久恵 (訳). 1999. (ハヤカワ文庫), 早川書房.
- Lionni, L. 1963. *Swimmy*. Dragonfly Books. Alfred A. Knoph.
『スイミー』谷川俊太郎 (訳). 1969. 好学社.
- Lobel, A. 1970. *Frog and Toad Are Friends*. Harper Trophy.
『ふたりはともだち』三木卓 (訳). 1972. 文化出版局.
- Lobel, A. 1976. *Frog and Toad All Year*. Harper Trophy.
『ふたりはいつも』三木卓 (訳). 1977. 文化出版局.
- Lucas, D. 2007. *The Robot and the Bluebird*. Andersen Press.
『ロボットとあおいことり』なかがわちひろ (訳). 2007. 偕成社.
- Lucas, D. 2008. *The Lying Carpet*. Andersen Press.
『ほらふきじゅうたん』なかがわちひろ (訳). 2009. 偕成社.
- Rey, H. A. 1947. *Curious George Takes a Job*. Houghton Mifflin Company.
『ひとまねこざる』光吉夏弥 (訳). 1983. 岩波書店.
- Varley, S. 1984. *Badger's Parting Gifts*. Lothrop, Lee & Shepard Books.
『わすれられないおくりもの』小川仁央 (訳). 1986. 評論社.
- Zion, G. (text) & Graham, M. B. (illustration). 1965. *Harry by the Sea*. HarperCollins.
『うみべのハリー』わたなべしげお (訳). 1967. 福音館書店.